九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

国際シンポジウム「プルーストと受容の美学」

和田，章男
大阪大学大学院文学研究科 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2556275

出版情報：Stella. 38, pp.93-100, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

《国際シンポジウム》

「プルーストと受容の美学」

和　田　章　男

2019 年 9 月 28 日・29 日の 2 日間，大阪大学で「プルーストと受容の美学」（« Proust et l'esthétique de la réception »）と題する国際シンポジウムを，日本学術振興会の支援（科学研究費補助金・基盤C「プルーストにおける音楽受容と小説創造」，代表・和田章男）のもと，日本プルースト研究会および関西プルースト研究会の共催により開催した。フランス人研究者 2 名，日本人研究者 11 名による口頭発表に基づき，活発な討論が行われた。28 日には 40 名，29 日には 30 数名の参加者があった。

日仏の研究者を中心とする国際シンポジウムの開催は，故・吉田城氏が吉川一義氏の協力を得て 2003 年 9 月に京都大学と東京都立大学で開催した「境界なきプルースト」（« Proust sans frontières »）に端を発する。日本のフランス文学研究者の多くは留学経験を持ち，フランスで学位を取得することを目指す。また頻繁に現地で調査を行い，論文をフランス語で執筆することも多い。当然ながらフランス本国の学界でも評価されるような国際的に通用する研究を心がけるのが伝統である。しかしながら，留学中のゼミナールでの発表や学位論文の口頭試問などを別として，国際学会でフランス語による口頭発表を行うことは稀だった。上記の国際学会以降，吉川一義氏とナタリー・モーリヤック氏を代表とする日仏共同研究（「Chorus プログラム」）や大型科研費の取得などによって，日本人研究者が参加するプルーストについての国際シンポジウムがフランスと日本で頻繁に開催されるようになった。このようにほとんど恒常的と言えるほどにまで国際学会を開催できるのは，日本のプルースト研究者の層が厚いからだろう。ベテランから若手まで各世代に優秀な研究者が揃い，フランスのプルースト研究界にも劣らないと自負できる。このような国際シンポジウムに専門家が集い討論を行うことによって，人的交流を踏まえた学術交流はいっそう密となり，常に同じ土俵に立って研究を推進している。

ここ数十年の間にプルースト研究の方法も課題も変化してきたことは言うまでもない。むしろプルースト研究が文学研究全般の動向をリードしてきたと言ってもよい。報告者が学生だった1970年代は依然としてヌーヴェル・クリティックが隆盛であった。作家の実人生などは文学研究の対象外とされ，あくまでテクストを自律したものとして分析することに固執していた。プルーストの小説は構造主義批評，テーマ批評，ナラトロジー，精神分析学批評などの対象として格好の題材とされた。

他方，70年代に公開されはじめたプルーストやフローベールの膨大な草稿資料が研究者の注目を集めた。草稿は，作家がある時ある場所で書いた唯一無二の歴史的産物であり，そこには作家が見たもの，聞いたもの，体験したものが，時には生のまま，時には加工されて導入される創作の現場である。テクストが自律したものではありえず，外部からの様々な働きかけによって，絶えず変容していく実態を草稿は証言している。テクストを「閉じたもの」としてではなく，あらためて「開かれたもの」として同時代の歴史的・文化的コンテクストの中に位置づけ，解釈するという昨今の研究動向は草稿研究がもたらしたといっても過言ではない。

『サント＝ブーヴに反論する』という評論が発展して形成された大作『失われた時を求めて』には，数多くの実在の人名が含まれており，物語形体の「百科全書」の観を呈している。実在の作家・芸術家あるいはその作品への言及や暗示は，小説世界に深みと広がりを与えるとともに，本作が西洋の歴史あるいは人類の歴史にしっかりと根ざしていることの証(あかし)でもある。プルーストはそれらの実在の作家たちや芸術家たちをどのように受容し，どのように作品に導入したのかという問いは，受容から創造へのダイナミックな転換の多様な様相を明らかにするものであろう。

プルーストにおける受容は，創造へと転換される能動的な活動であるがゆえに，本シンポジウムでは「受容の美学」という表現を用いた。それは文学・芸術の領域だけに留まらず，思想・政治・科学・教育など広く多様な分野が対象となる。フランスからプルースト草稿の専門家ナタリー・モーリヤック・ダイヤー氏，音楽受容を専門とするセシル・ルブラン氏が参加した。草稿と書簡の専門家であるフランソワーズ・ルリッシュ氏は都合により来日が叶わなかったが，シンポジウムにおいて同氏の業績が頻繁に引用されたことを申し添えたい。

以下に，発表者自身によって作成された発表内容の要旨を登壇順に掲げる。なお，発表および討論はすべてフランス語で行われた。

津森圭一（新潟大学）

「プルーストとナビ派の画家たち」«Proust et les Nabis»

モーリス・ドニとヴュイヤールはプルーストと同じコンドルセ高等中学の出身であり，青年期には『白色評論』，美術館や画廊，社交界などで作家とこれらの画家たちは活動の領域を同じくしていた。また，プルーストと交友関係にあったビベスコ兄弟は，ボナールやヴュイヤールとも親友であった。これらのことを考慮すると，プルーストと彼らナビ派の画家たちが芸術の上でも刺激を与え合っていたことは十分にあり得る。とりわけ『見出された時』で展開される「等価物」の理論は，ドニの『理論集』でも繰り返し検討されているテーマであり，象徴主義の風土のもとで青年時代を送ったプルーストとナビ派の画家たちに共通する美学として再検討することが可能である。(『ステラ』本号掲載論文を参照)。

松原陽子（明治大学）

「イポリットの死と絵画『カルクチュイ港』」«La fin d'Hippolyte et le "Port de Carquethuit"»

『失われた時を求めて』における絵画『カルクチュイ港』については，先行研究として，実在の絵や広告ポスターがモデルとなっていることを指摘したものがある一方で，その描写文を馬の隠喩が組み込まれたテクストとして分析したものがある。本発表では，この絵の描写文とプルーストが読んでいたと考えられる演劇作品のテクストを照らし合わせ，共通する比喩が用いられていることを指摘した上で，間テクスト性という観点から新たな解釈を提示した。小説の内的論理による要求に応じて書かれたこの描写文における海のイメージが小説内部の装置として，どのような働きを持っているのかを考察した。

村上祐二（京都大学）

「プルースト初期作品におけるユダヤ人」«Proust entre Bernard Lazare et Drumont»

初期プルーストにおけるユダヤ性・反ユダヤ主義の問題を，ドレフュス事件勃発前夜の1890年代前半に『バンケ』誌と『ルヴュ・ブランシュ』誌に発表された3つのテクストを通して分析。伝記的コンテクスト（アドルフ・クレミウとダマスカス事件，ベン＝レヴィの著作活動をはじめとする母方の家族の記憶），政治的コンテクスト（ロシア・中東欧からの移民，露仏同盟，ユニオン・ジェネラル銀行破綻，パナマ運河事件）を視野に入れつつ，当時の歴史記述（ルナン，グレーツからダルメステテール，レーナック兄弟，ドリュモン，ルロワ＝ボーリウまで），小説（フローベール，ゾラ，バレス），ジャーナリズム（とりわけベルナール・ラザール）におけるユダヤ人像と対比しながら，初期プルーストにおける反ユダヤ主義的ユダヤ人観の形成と特質を浮き彫りにする試み。

加藤靖恵（名古屋大学）

「ファロア版『サント＝ブーヴに反して』におけるラスキン批評」«Profil de Proust “contre Ruskin” ébauché dans le montage par Fallois»

1908年よりフィクションと文学批評を組み合わせ，サント＝ブーヴ批判を展開する作品に取り組んでいたことが，プルーストの書簡で述べられているが，具体的な構想については不明である。ルーズリーフや草稿ノートに書かれた断片を集め，架空の『サント＝ブーヴに反して』を提示したのが，1954年のファロア版である。正確な生成研究に基づいたとは言いがたい，編者の自由な発想で編まれた版ではあるが，1971年のプレイアッド版をはじめ，他の研究への影響は否めない。彼が選択し並べ替えた一連のテクストを読むことによって，『失われた時を求めて』執筆時に，ラスキン批判の姿勢を貫きながらも，その美学の強い影響の下で小説の世界が構成されたことが改めて確認できる。

湯沢英彦（明治学院大学）

「プルーストの芸術家像における「内的祖国」の問題」«La “patrie intérieure” ou la figure proustienne de l’artiste»

プルーストにおける芸術家像を再考するにあたって，「内的祖国」という概念に着目した。「祖国」という言葉は，作曲家ヴァントゥイユの独創性を語る一節の中に，4回も繰り返されていて，創造行為の核にあるものの比喩的表現だとみなせる。発表の前半は，個々の作品が，未知のままにとどまる「祖国」の「断

片」として現れるというプルーストの主張に着目し，象徴主義美学の「暗示の技法」との違いを論じた。後半はさらに，象徴主義を含めた世紀転換期における〈表現〉概念の危機的状況において，プルーストがいかにして表現する個人の価値を，あるいは創造する主体の意義を守ろうとしたか，あるいは語ろうとしたか，と問いを立て，その観点から，「祖国」という，回帰の運動を必然的にうながす概念に託された役割について考察した。

和田章男（大阪大学）

「プルーストと『春の祭典』」« Proust et *Le Sacre du Printemps* »

ストラヴィンスキーの『春の祭典』のパリ初演とプルーストの『スワン家のほうへ』の出版は，1913 年をのちに「奇跡の年」と言わしめる画期的な出来事となった。プルーストは『春の祭典』をどのようにとらえたのか。ジャック＝エミール・ブランシュの『スワン家のほうへ』についての書評を広報する際に，プルーストは同人の『春の祭典』論を並置する。一見大きく異なる両作品でありながら，ブランシュの両評論を比較するなら，ともに分類することができない独創的な作品であること，またロシア芸術に特徴的に見られる匿名性は，『失われた時を求めて』の語り手の匿名性，および語り手が書こうとする理念上の小説もまた作者匿名のものとなることなど，プルーストはブランシュの評論を通じて，『春の祭典』への潜在的な親近性を見出したと論じた。（『ステラ』本号掲載論文を参照）。

セシル・ルブラン（パリ第 3 大学）

「《オベールにふさわしい寛大さをもって》？『失われた時を求めて』におけるシュトラウス『サロメ』の受容研究」« “Avec une indulgence digne d’Auber” ? Étude de réception de la *Salomé* de Strauss dans la *Recherche* »

リヒャルト・シュトラウスのオペラ『サロメ』はパリでは 1907 年 5 月にシャトレ劇場，ついで 1910 年 5 月にガルニエ劇場で初演された。この「傑作」に向けられた批評に完璧に沿って，プルーストはこのオペラの受容を現代の芸術創造におけるスノビスムの役割を例証するものとしたばかりでなく，魔法の瞬間とうんざりする瞬間が交錯する矛盾に満ちた音楽の現代性のモデルのひとつとした。ヴァントゥイユの「七重奏曲」にはその天才性と時折みられる弱点によっ

て確かに『サロメ』受容の痕跡，とりわけ 1907 年から作曲家が時折見せる制御力の欠如を指摘していたレーナルド・アーンの批評の痕跡が認められる。『失われた時を求めて』では友人の名前まで消したプルーストは，ヴァントゥイユの弱点の中に，たまにインスピレーションを欠くことのある親しい音楽家の思い出を保持しようと望んだのではないだろうか。

池田潤（白百合女子大学）

「『サント＝ブーヴに反論する』のむこうのサント＝ブーヴ」« Sainte-Beuve au-delà du *Contre Sainte-Beuve* »

プルースト研究者にとってサント＝ブーヴは「反論された」批評家だが，その著作を虚心に読み直すと両者の間の共通点に興味をひかれることになる。実際，『失われた時を求めて』のプルーストは随所で，こっそりとサント＝ブーヴへの同意を示している。これはこの作品と『サント＝ブーヴに反論する』との本質的な不連続面であり，サント＝ブーヴについての考え方が変化したかもしれないということ以上に，そこに批評と小説という表現形式の差が如実に表れているといえる。

中野知律（一橋大学）

「プルーストとパランプセスト」« Proust et le palimpseste »

『失われた時を求めて』の中にあらわれる「パランプセスト」の語例の一つには，マニュスクリ贋作事件をめぐる 19 世紀末の文壇の動きが投影されている。科学と歴史学への傾倒を批判的にとらえ始めた時代のいくつかの言説から，プルーストは何を読み取り，自らの小説美学に結びつけていったのか。ヴィルパリジ侯爵夫人のサロン情景と「回想録」の歴史性 / 文学性をめぐる語り手の見解を通して考察した。（『ステラ』本号掲載論文を参照）。

小黒昌文（駒沢大学）

「科学大衆化時代のプルースト」« Proust à l'ère de la vulgarisation scientifique »

本発表の主眼は，19 世紀後半に隆盛を極めた通俗科学をめぐる諸言説とプルーストとの距離を再検証し，作家の小説美学との影響関係を探ることにある。

多種多様な科学雑誌が次々と刊行され，文芸誌にも積極的に科学時評が掲載される時代状況にありながら，プルーストのテクストには奇妙なほどその痕跡が残されていない。しかしながら，科学の通俗化の舞台が次第に学校教育の場へと移行し，1880 年代からは科学教育としての «leçons des choses» が急速に拡大したという事実は着目に値する。子どもたちが日常を取り巻く事物をひとつひとつ「観察する」ことで世界を発見していくその営みは，若き日のプルーストが「シャルダンとレンブラント」に描き出した，日常的な美の発見をめぐる美学的・自然科学的なプロセスと共振するのではないか。シャルダンの静物画に導かれながら世界を繙いてゆく眼差しは，時代のコンテクストをめぐる作家独自の応答と読み替えることができるだろう。

横山裕人（成蹊大学）

「教育改革過渡期のリセ生徒プルースト」«Proust lycéen dans la période de transition didactique»

プルーストがリセ・コンドルセに在籍した時代は，フランス中等教育改革の過渡期にあたっている。それは，ギリシア・ローマ文学やフランス文学の古典的な作品の教育上の位置づけも変わろうとしていた時代である。その渦中にあった少年プルーストの学校作文は，受容と創造の関係の具体的な様相を解明するのに興味深い資料となる。本論では，最初に，第 2 年級在籍中（1886 年 3 月）に書いた作文「月蝕」の問題文を推定する。従来の説（E. Kaës, 2019）が提示する問題文（Th. H. Barrau）よりもプルーストの作文に適合する問題文（A. Filon）を提示した。続いて，フィロンの問題文・模範解答例とプルーストの作文との比較を古典レトリックの観点から行い，登場人物の性格付けや文体的な技巧について検討した。この結果，問題文に必ずしも従わず月の描写に注力するプルーストの独自な姿が浮き彫りになると同時に，プルーストの用いる語彙・表現に，1880 年の中等教育改革で単なる暗誦用のテクストから文学史的説明対象となった撰文集にも依然として掲載されていたベルナルダン・ド・サン ＝ ピエールやシャトーブリアンの文章の影響がみられることを指摘した。また前者の『自然の調和』の一節が，プルーストの別な作文「雲」の源泉となる可能性も示した。学校作文に現れた月の描写はプルーストの生涯にわたって繰り返され変化していくが，その変化の過程にもプルーストの創造行為の変化を

読み取っていくことができるのではないだろうか。

ナタリー・モーリヤック・ダイヤー（ITEM/CNRS）
「年末のレヴュー，プルーストにおける小ジャンルの創造性」«La revue de fin d'année, fécondité proustienne d'un petit genre»

なかば仮装した若い頃のオデット・ド・クレシーを表す「ミス・サクリパン」と題されたエルスチールの水彩画の源泉は，おおむね印象派絵画やプルーストの父と叔父が蒐集していた高級娼婦の写真の方面で探求されてきた。本発表では，プルーストは現実には友人ロベール・ドレフュスの著作『年末のレヴューの小史』(*Petite histoire de la revue de fin d'année*, Fasquelle, 1909）に掲載されていたレヴュー女優の３枚の写真から着想を得たことを示した。論証にあたっては，プルーストが個人的に所蔵していた著作や書簡，生成過程，および『見出された時』の草稿帳を手がかりとした。

吉川一義（京都大学・名誉教授）
「『見出された時』におけるゴンクールの擬似未発表日記」«Le pseudo-inédit de Goncourt dans *Le Temps retrouvé*»

『見出された時』に引用されるゴンクールの『日記』の文体模写は，プルーストの文学理念とは相容れない具体例として，エドモンによるヴェルデュラン夫人のサロンの描写を提示し，珍しい語彙を駆使した美文調をはじめ，小物商「オ・プチダンケルク」の勘定書や金物商「ペリエ」の宣伝チラシ（サン＝トーバン作）などに見られるゴンクールの蒐集趣味を批判した「実践的文芸批評」である。ゴンクールの偽日記は，コンティ河岸のサロンにおけるスワンの存在や，ヴェルデュランの「美術批評家」としての側面など，読者が知悉する『失われた時を求めて』の背後に，それとはまるで異なる現実が隠されていることを示唆する。